

2011年3月11日、激しい揺れと津波が福島第一原発を襲った。
そのときから男たちの壮絶な闘いが始まった!

吉田昌郎、菅直人、斑目春樹…、当事者たちが赤裸々に語った
「原子力事故」驚愕の真実とは!

門田隆将 著

『死の淵を見た男

吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日』発売!

株式会社PHP研究所(京都市南区・代表取締役社長 清水卓智)は、2012年11月22日(木)、
門田隆将著『死の淵を見た男』を発売しました。



定価：本体1,700円(税別)

四六版/上製/388ページ

ISBN978-4-569-80835-2

■生と死をかけた「日本を守る闘い」の始まり

「もう駄目かと何度も思いました。私たちの置かれた状況は、飛行機の操縦席で、計器もすべて見えなくなり、油圧も何もかも失った中で機体を着陸させようとしているようなものでした」(本書「はじめに」より)。2011年3月11日、線量計が高い数値を示し、甲高い警告音がなる漆黒の闇の中で、吉田所長(当時)と、多くは地元福島に生まれ育った男たちの、生と死をかけた「日本を守る闘い」が始まった。

■本書では原発の是非を問わない。なぜなら…

著者は、本書は原発の是非を問うものではないと言う。なぜなら、原発に「賛成」か「反対」かに重きをおけば、吉田昌郎とその仲間たちが死を賭して、何とか事故を最小限に抑え、日本を守ろうとした彼らの「人としての意味」が見えにくくなるからだと言う。著者は現代日本人の傾向を「自分のためだけに生きる世代」(本書「おわりに」)と指摘する。たしかに原発事故は不幸な事故ではあるが、今の日本にもなお「他人のために生きる」人々がいたことを伝える希望の書なのである。

■当事者たちの赤裸々な証言

本書は、事故直後から現場の指揮を執った吉田所長(当時)をはじめ、菅前首相、斑目原子力安全委員会委員長、極限状態のなかで作業に従事した東電社員や協力企業の人々、またその家族たちでなければ語れない真実を紡いだノンフィクションである。そうした当事者たちの声は、人間には命をかけなければいけない時があるということ、計算されつくした小説より雄弁にわれわれに伝えてくれるのである。

Profile 門田隆将 かどた・りゅうしょう

1958年、高知県生まれ。中央大学法学部卒業。雑誌メディアを中心に、政治、経済、司法、事件、歴史、スポーツなど幅広いジャンルで活躍している。著書に、『なぜ君は絶望と闘えたのか 本村洋の3300日』(新潮文庫)、『あの一瞬 アスリートはなぜ「奇跡」を起こすのか』(新潮社)、『甲子園への遺言』(講談社文庫)、『神宮の奇跡』(講談社)、『康子十九歳 戦禍の日記』(文藝春秋)、『甲子園の奇跡 斎藤佑樹と早実百年物語』(講談社文庫)、『屋根のかなたに 父と息子の日航機墜落事故』(小学館文庫)、『太平洋戦争 最後の証言(第1部～第3部)』(小学館)などがある。『この命、儀に捧ぐ 台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』(集英社)で、第19回山本七平賞を受賞。

PHP研究所

東京本部 〒102-8331 東京都千代田区一番町21 京都本部 〒601-8411 京都市南区西九条北ノ内町11
広報宣伝部 TEL 03-3239-6229 (担当:山田、瀬間、石崎)